

兵庫が育む こころ豊かで自立した人づくり

兵庫教育

12月号

2017 No.802

特集

グローバル社会で活躍するために
— 異なる文化を理解し、豊かなコミュニケーション能力を育む —



動きの基本は、すり足! —能楽体験—

～たつの市立揖西西小学校～



月刊「兵庫教育」

URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所

特集

グローバル社会で活躍するために
—異なる文化を理解し、豊かなコミュニケーション能力を育む—

学校訪問

すべての子どもに 豊かな学びと 豊かなつながりを

たつの市立揖西西小学校

管理職による随想

「ライフステージごとにテーマを持って」

丹波市立山南中学校長 足立 宏規 1

論文

「グローバル社会で活躍する人材育成について」

神戸大学大学院国際協力研究科 教授 小川 啓一 4

教育実践

英語に慣れ親しみ学ぶ意欲につながる連携のあり方
～保・幼・認定こども園・小・中・養の連続した学びの創造～

加古川市立上荘小学校 主幹教諭 嶋 基伸 8

「分かる授業を目指して」
～英語好きな生徒の育成～

猪名川町立中谷中学校 主幹教諭 福山 康司 11

在外教育施設派遣教員からのメッセージを活用して

明石市立高丘中学校 教頭 山田祥千子 14
主幹教諭 増田恵津子スーパーグローバルハイスクール課題研究活動を通じたグローバル人材の育成
～カンボジアスタディツアーと移民政策学会での活動を中心に～

県立国際高等学校 主幹教諭 前川 裕史 17

グローバル化する社会への対応（第32回）

「これからの『国境』が意味するもの」
～海外の教育と国際協力の現場から日本を考える～

認定NPO法人 Future Code 理事長 大類 隼人 24

授業実践研修レポート

小学校 国語科 「歯がぬけたらどうするの」

授業者：篠山市立西紀南小学校 教諭 酒井友里菜 28
県立教育研修所 義務教育研修課



「自殺予防に生かせる教育プログラム」の活用（第2回）

「自殺予防に生かせる教育プログラム」の活用の留意点

県立教育研修所 心の教育総合センター 32

授業づくり

小数のたし算・ひき算の計算の仕方を考える

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授 おか べ やすゆき
岡部 恭幸 34

随 想

「夢をかたちに」から「本氣挑戦」へ

県立兵庫工業高等学校 教諭 い ど やすよし
井戸 康善 36

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒等への指導（第55回）

～幼稚園における特別支援教育の取組について～

－加古川市「特別支援ルーム」の取組から－

加古川市立浜の宮幼稚園長 にしかわ けい こ
西川 恵子 39

コラム「教育の接点」

じゅうたんの上で

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問 はやし よし き
林 芳樹 40

編集後記

トピックス P20～23

〔但 馬〕豊岡市立城崎中学校
自他を尊重する心を育む……………22

〔播磨東〕加古川市立平岡南幼稚園
家庭や地域の中で育つ みなみっ子…21

〔播磨西〕佐用町立上月小学校
地域に支えられた学習……………22

〔県 立〕県立東播工業高等学校
地域合同防災避難訓練……………20

〔丹 波〕篠山市立岡野幼稚園
『ステキなこと・人・もの』
との出会いを大切に……………23

〔神 戸〕神戸市立真野小学校
ICTを活用した授業改善……………20

〔阪 神〕伊丹市立西中学校
給食がスタートしました！……………21

〔淡 路〕洲本市立第三幼稚園
チャレンジするぞ！……………23



英語に慣れ親しみ 学ぶ意欲につながる連携のあり方

～保・幼・認定こども園・小・中・養
の連続した学びの創造～



加古川市立上荘小学校
主幹教諭 しま もとのぶ 基伸

1 はじめに

本市は、教育施策の一つとして平成19年度から校種間連携「ユニット12」推進事業を立ち上げ、平成21年度から事業名を子どもの学びや育ちをつなぐ「中学校区連携ユニット12」と改め、学校園・家庭・地域が連携する取組を進めている。この「中学校区連携ユニット12」とは、各中学校区を一つの単位（ユニット）とし、その地域の異なる校種が相互に連携（タテの連携）し、同時に家庭や地域との連携（ヨコの連携）を図りながら、地域総がかりで子どもの連続した学びや育ちを支援する教育活動である。現在、市内12ユニット104校園で構成されている。（平成29年9月1日現在）

本校が属する「両荘中学校区ユニット」は、市の北部に位置し、加古川を東にして田園風景が広がり、四季折々の変化に富んだ自然豊かな地域で展開している。しかし、当ユニットの2小学校が単学級編成の小規模校であることからわかるように、年々、少子化現象が進む地域である。子どもの数の上では小規模のユニットではあるが、それぞれの学校園が、アイデアと時間を出し合って連携を深め、効果的でより良い学びの推進に取り組んできた。その取組の一端ではあるが、7校園（1中学校、2小学校、1養護学校、3保・幼・認定こども園）で構成した両荘中学校区ユニットが、平成27・28年度の2ヶ年に渡って、「外国語教育」を軸として実践してきた連続した学びの創造に関する研究について紹介する。

2 研究組織の体制づくり

「外国語教育」という大きなカテゴリーを前にして、まず着手したことは研究テーマの設定である。同時にそれぞれの学校園の「課題の把握」であった。それらを協議した結果、標記の研究テーマを掲げた。そして、ここから始まる一連の研究がブレることなく、継続的に推し進められるように次のような柱を設けた。

- ①ユニットとして、タテ・ヨコの連携が拡充する「外国語教育」であること。
- ②市内のどのユニットにおいても、実現可能な取組にしていくこと。
- ③教育実践の情報や教材が、市内の各校園と共有できるようにすること。

具体的な研究の始まりが「まずは指導者同士がつながろう」であった。互いの保育・教育の実践を知らずして、研究を進めていくことは困難である。7校園の指導者が一同に集まり、英語研修の機会を設定した。また、それぞれが保育・授業を公開することで、取組の実態や実状を見せ合い、互いの研修の題材としていった。それぞれの発達段階において、各校園が日頃から大事にしていること、育みたい力、保育・授業の指導技術・スキル面等、大きな刺激となり、指導者がそれぞれの立場で新たな気づきとなった。この点については外国語教育に限った話ではなく、「中学校区連携ユニット12」のように地域総がかりの教育を発展させていく上では、他校種の実践を積極的に公開し合って、理解を深める手立てとしては、大変効果的で大切なことである。

3 校種間の連携

(1) 保・幼・認定こども園について

そもそも経営母体や保育ニーズの異なる3園ではあるが、外国語教育の実施にあたり同じ教材と活動を扱うこととした。これは加古川市のユニットで実施している就学前教育カリキュラム（五つの歌・五つの本・三つの遊び…全ての園において同じ教材を使用した保育の実施）にならったもので、五つの英語の絵本と活動の始めと終わりに歌う歌を選定し、保育を実践した。特に、小学校低学年において選定された本や歌を使用した活動を取り入れるなど、小学校との学びの連続という点でタテの連携が整えられた。

(2) 小学校について

小学校6年間の系統立てたカリキュラムの策定と教材・教具の開発、活動ライブラリー（図1）の作成などを進める一方で、指導技術の研究を進めた。その際の指導形態については、

- ①担任とALTで実践する授業
 - ②担任が単独で実践する授業
 - ③担任と中学校英語担当教師で実践する授業
- など、いくつかのパターンを想定した授業公開を行い、研修に努めた。また、以下のよう

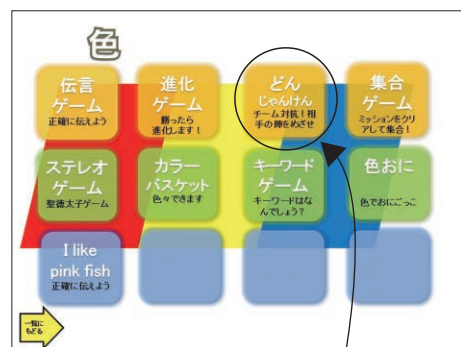
- ・動作を表す単語カード（36語）を、中学校英語教科書に掲載されるイラストを用いて作成。何度も繰り返し口にする中で、自然に身につけることができた。
- ・ローマ字のヘボン式表記やアルファベットに慣れ親しむ。
- ・中学校英語担当教師による乗り入れ授業。
- ・学習内容の見通し、つながりを意識した指導の具現化。
- ・CAN-DOリスト（中学校）とENJOYリスト（小学校）を軸とした評価の工夫。（注）

異校種間の連携と6年間のカリキュラム系統を策定し、就学前から小学校、小学校から中学校に至るスパイラルな学びが構築できるように、つながりを意識した活動を展開した。

指導一覽 内容をクリックすると活動集にとびます

内 容	主な表現・単語	1年	2年	3年	4年	5年	6年
ショートタイム							
あいさつ	Hello, Good morning.	◎	◎	◎	◎	◎	◎
じゃんけん	Rock scissors paper	◎	◎	◎	◎	◎	◎
色	Red Blue Yellow Green	◎	◎	◎	◎	◎	◎
気もち	How are you? I'm ~	◎	◎	◎	◎	◎	◎
天気	Sunny Cloudy Rainy	◎	◎	◎	◎	◎	◎
数(1~10)	One Two Three	◎	◎	◎	◎	◎	◎
数(11~20)	Eleven Twelve Thirteen	◎	◎	◎	◎	◎	◎
形	Circle Triangle Square	◎	◎	◎	◎	◎	◎
名前(年齢)	My name is ~, I'm ~	◎	◎	◎	◎	◎	◎
食べ物(果物・動物)	Carrot Apple	◎	◎	◎	◎	◎	◎
動物	Lion Tiger Horse	◎	◎	◎	◎	◎	◎
アルファベット	A to Z	◎	◎	◎	◎	◎	◎
体のパーツ	Head hand eye nose	◎	◎	◎	◎	◎	◎

クリック



クリック

ゲーム・活動名 英語でどんじゃんけん

相手の陣地をとるゲーム

準 備 物	フラッシュカード(学習内容にあったものなら何でも良い)		
手 順	日本語	先生の使う英語	子どもの使う英語
チーム分け	チームにわけましょう		Blue, Black,
	色を言いながら進みます		
説 明	ふつかったらじゃんけん 勝ったらすすみます 相手の陣地までいったら勝ちです	Winner go, loser back	What color!

☆説明はデモンストレーションが有効。色の学習なら色画用紙が使える。

▲ 図1 活動ライブラリー

(3) 中学校について

中学校入学を前に小学6年生を迎えて実施する小中交流会で、生徒会が中心となり外国語活動を通じた交流の時間を設けた。ALTも加わり、自己紹介などにより児童生徒が一緒に外国語活動を楽しんだ。新1年生を含めて英語検定受検者数が増加するなど、英語への関心が高くなっていることがうかがえる。

(4) 加古川養護学校について

これまでも特別支援学校のセンター的機能を果たしながら、当ユニット活動においても子どもたちの交流活動に積極的に取り組んできた。外国語教育については、小学生との

交流を中心に実践した。互いの子どもたちにとって新鮮な交流会となり、英語に慣れ親しむという観点についても、概ね達成することができた。

4 成果と課題

新学習指導要領の公示を前にした平成27・28年度の2ヶ年に渡る研究実践であったが、その時々において今後予想されるいろいろな可能性を想定して、校種間連携のカリキュラム作成とその実践に取り組んできた。また、家庭や地域とのヨコの連携も模索し取り組んできた。このような研究を終えて改めて振り返ってみると、平成29年3月に公示された新学習指導要領が示す目標や方向性から、大きく逸れるところのない取組を行うことができたことは、一つの大きな成果だったといえる。そもそも「社会に開かれた教育課程」の観点でいえば、少なくとも、地域の子どもを育む同一中学校区内の学校園が連携を図り、保育・教育目標に即して共通実践してきたこと自体が、既にその一端を成す取組であったともいえる。また単学級小規模校の2小学校においては、これまでも単学級ということから、同一学年における教員間の協議・協働が成立しないという現状があったが、この研究を通して相互の連絡会を立ち上げ、学年間を中心とする指導者交流会の設立に繋がったことも、特筆しておきたい。

続いて研究の始めに設定した三つの柱を見直してみる。タテのつながりをもつ校種間が



▲ 2小学校連絡会

外国語教育という軸の下で協働し、それぞれがアイデアと時間を出し合うことで具現化した取組について、拙いながらも取りまとめた発表・報告をすることができた。また、教材・教具の開発や活動ライブラリーなどを広く共有化していくことも、一定の形を成すものとして成果を挙げることができたように感じている。今後、さらに充実した内容の活動ライブラリーに更新していくことや新しい教材・教具の開発に向けて、多方面からの指導と協力を得て展開できればと思う。

しかしながら、実践してきたこの2年間の取組は、まだまだ動き始めた段階に過ぎない。保育・教育で実践してきたことが、近い将来において子どもたちの学びの姿をどのように形成していくのかを継続的に検証していく必要がある。同時に新学習指導要領との整合性をもう少し細かく検証し、必要な改良を講じながら「中学校区ユニット」として連続した学びの創造に向けて研究を進めていくことも課題の一つといえる。さらに各校園において教職員の構成に変化が生じて、細くとも長く継続した教育実践を引き続き展開していくことも、これからの課題といえる。

5 おわりに

外国語教育というカテゴリーで人と人との連携を深めながら取り組んできた2年間の研究実践は、いろいろな可能性と深まりに富んだ「指導者の学び」となった。折しも新しい学習指導要領への移行期を迎えて、これをより良い変革の機会と捉えて、外国語教育に留まることなく、より一層タテ・ヨコの連携を深めながら、地域総がかりの教育の推進に努めていきたい。

(注) CAN-DOリスト (中学校)

加古川市が独自に作成した、中学校各学年で到達すべき目標を系統的に表したものの。

ENJOYリスト (小学校)

CAN-DOリストの小学校版。小学校5・6年生の各学年で到達すべき目標を系統的に表したものの。

特 中学校 集 No.2

「分かる授業を目指して」
～英語好きな生徒の育成～



猪名川町立中谷中学校
主幹教諭 福山 やすし 康司

1 はじめに

本校は猪名川町の南部に位置し、今年70年目を迎えた歴史と伝統のある学校である。昭和56年に現在の場所に校舎を移転して以降、日生ニュータウンの開発により年々生徒数が増加していった。その後、町南西部の開発が進み、平成2年の猪名川中学校新設に伴い、校区を分割し、本校の生徒も分離した。それ以後は、少子化が進む中で、校区の小学校が統合されるなど、現在では各学年2学級の小規模の学校となっている。

本校は、保護者の教育に対する関心や熱意がとても強く、通塾率も非常に高い地域である。また、PTA活動も継続的に安定していて、卒業生をはじめとして、行事等に対しては協力や支援が多く得られる。そういう保護者に支えられて校区に根ざす本校は、町をリードし、阪神間においても先進的な取組を行ってきた。平成2年度、小学校に加えて希望する中学校も対象（平成2年度～平成10年度）となった「自然学校」を実施し、平成10年度には「トライやる・ウィーク」を先行して行った。いずれも大きな成果をあげるなど、その後に続く手本を示した。

平成22年度からは「サタデースクール」を開校し、卒業生の力を借りて本校生徒の学習支援を行っている。また、個別支援や合理的配慮の必要性が高まる中で、積極的にユニバーサルデザイン（以下、UDと記す）の研究を進め、平成25年度から2年間、猪名川町より「学校生活のユニバーサルデザイン化推

進校」の指定を受けた。UDについては一定の成果を実感した上で、さらなる学力向上を目指す取組を進めている。

2 授業改善

中学校では、卒業後の進路に向けての入試対策というものが大きなウェイトを占め、どうしても授業やテストづくりがそれを意識したものになりがちである。まして、本校のように通塾率の高い地域では、授業内容やテストの出題項目が「入試に関係する」かどうかに対しての関心は高い。テスト前には「〇〇先生のテスト」ということで、過去の問題でテスト対策がなされている。そういう背景の中で、長年、教師主導で演習や文法的な解釈を中心にした授業を行ってきた。「絶対評価」による「観点別評価」が導入され、各観点を意識した授業づくりを目指し、授業手法やテストの出題内容も改善されていったと思うが、生徒の活動を生かす授業づくりには及ばなかった。

(1) 誰にでも分かる授業

平成27年度に「英語教育推進リーダー研修」に参加させていただき、英語教育に対する考え方や今までの教育実践を大きく変える必要性を感じた。と同時に、平成28年度に猪名川町で開催される「阪神地区中学校英語研究大会」に向けても研究テーマを「自ら発信する力を高めるために～アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善～」と改めることにした。

このテーマは本町が進めているUDの授業推進とも一致し、「誰にでもわかる授業」づくりに向け、教師一人一人の大きな意識改革にもなった。

(2) アクティブ・ラーニング

①目的

- ・生涯を通じて、主体的に英語を学び続ける力を育て、「自立した学習者」を育成する。

②定義

- ・英語の学び方を能動的に英語で学ぶ活動。
- ・英語を使って多様な考え方を能動的に学んだり、自分の考えを表現したりする活動。

③方法

- ・英語を「コミュニケーション・ツール」と捉え、英語で「聞く」「話す」「読む」「書く」能力を育てるトレーニングをする。
- ・一斉音読からペアで「聞き役」「伝え役」を設定し、伝える意識を持たせる。
- ・本文における「作者の伝えたい1文」を考えさせ、音読活動に意味を持たせる。
- ・単語や発音の繰り返し、文法の解説だけではなく、類似したものや関連性を意識させながら学び方を教える。
- ・自分の考えを自由に表現する創造的な活動を大切にし、教科書の内容を通して学んだことや思ったことを英語で表現できることを目指したり、間違いやすい表現の違いを言語文化や文法的な視点で考えさせ意見交流させたりする。
- ・スモール・ティーチャー（先生の代わりをする生徒）を導入し、問題の解説や音読活動などのリーダーを務めさせることで、生徒が主体的に学習に取り組める機会を与える。
- ・「こうでなければならない」という固定観念にとらわれず、教師自身が楽しみながら自由な発想でアクティブに挑戦するよう心がける。

(3) 授業の実態

- ・「リフレクション・シート」の活用
授業のGOALを示し、到達度や成果・反省などを個人で振り返る。

・ペア活動

「新出単語」の発音と意味や「大切な構文」の暗唱など聞き手（出題）と話し手（解答）に分かれて一定の時間内で行い、用紙に記録する。活動の共有や確認を行い、授業に参加できない生徒をつくらない。

・グループ活動

個人→ペア→グループという流れを多くの活動場面に取り入れる。

ワークシートの協同作業や表現の違いの理由など、いろいろな答えが考えられる場面で取り入れる。

・授業内での失敗の奨励

積極的な発言を促し、失敗を受け入れ共有できる雰囲気をつくる。

・空欄なし

どんな問いに対しても自分の答えや考えを持たせ、それを肯定的に受け入れる。

・授業開始5分間

帯活動として、単語や表現、文法などの振り返りや確認テストを行う。

(4) 教師の役割

・生徒の自立を育てる

指示されたことだけを行うことは学習者の本来のモチベーションではない。「失敗する」「間違える」という経験を積ませ、友だち同士が助け合いながら共に解決法を見いだしていく集団をつくる。

・「知識」ではなく「学び方」を教える

生徒に尋ねられてすぐに答えることは効率的ではあるが自立した学習者は育たない。考えるきっかけを与え、辞書などを使わせて自分で答えを見つけさせる。

・ファシリテーターとして務める

「教え込み」の授業から脱却し、どのような自立した学習者を育てたいかを考えながら、明確な目標を持ってわかりやすく示すようにする。また、目標達成に向けてどのような活動を取り入れ、どう支援していくかを計画するとともに、付けさせたい力を「CAN-DO」リストなどにまとめて適切に評価していく力を身につける。

3 「考える」活動の事例(グループ活動)

課題に対して「答えを覚える」ということから脱しきれない生徒もいることから、「何故そうなるのか」をグループで考える場面を授業の中で設けた。グループ活動では、聞き手にうまく説明するというねらいで自分の考えを発表し、リーダーが意見を集約した。生徒たちは、今まで学習してきたことを活かして、グループ内で様々な意見を出し合い、共有したり、説明したりすることで自分の考えを深めることができた。また、思考するためのポイントや学習の方向性については、以下のとおりワークシートに示した。

(1) not について考える (ワークシートの例)

①not は否定を表す語

アbe動詞・助動詞

否定する内容の直前におく。

→not の後ろが否定される。

イ一般動詞

don't/doesn't (didn't) を一般動詞の直前におく

→一般動詞を否定する。

〈be動詞〉

I am [not a rock fan].

私は「ロック・ファンではない」です。

=私はロック・ファンではありません。

That is [not my bike].

あれは「私の自転車ではない」です。

=あれは私の自転車ではありません。

〈一般動詞〉

They do not [eat Japanese food].

彼らは「日本食を食べる」をしません。

=彼らは日本食を食べません。

My brother does not [like soccer].

兄は「サッカーが好きになる」をしません。

=兄はサッカーが好きではありません。

〈助動詞+動詞〉

I will [not come back soon].

私は「すぐに帰ってこない」つもりです。

=私はすぐに帰ってくるつもりはありません。

It may [not be true].

それは「本当ではない」かもしれません。

②〔 〕の部分のもとの意味を考え、それをもとにして、日本語の意味を考えよう！

(2) 意味の違いを考える

①must と have/has to の否定の意味

〈肯定文〉

ア You must go there.

あなたはそこへ行かなければなりません。

イ You have to go there.

あなたはそこへ行かなければなりません。

〈否定文〉

ア You must not go there.

あなたはそこへ行ってはいけません。

イ You don't have to go there.

あなたはそこへ行かなくてもいいです。

②考察

“not”の使い方を理解して、上のア、イの否定文の意味の違いについて、その理由を考えよう！

4 おわりに

教師になって「英語」は中学校で教えるべき一つの「教科」として捉えていた時期が長かったように思うし、まだその感覚から完全に抜け切れていない。しかし、「言葉」という一つの生き物として感じるようになって、英語という教科や授業に対する見方が大きく変わったように思う。日本語と比較し、その言語の背景や仕組みが理解されていく中で、自分自身が今まで以上に高い興味や関心を抱くようになり、その面白さを生徒と共有できたらと思うようになってきた。

「英語が話せたら格好いい」と自分たちの若い頃はよく言われたものだが、そういう英語への単なる憧れではなく、日常で生活していく上での伝達手段の一つとして使えるよう今後も指導していきたいし、その責任は大きいと思う。何より「英語が好き」な生徒をどれだけたくさん育てられるか、そのためにも自分自身が日々楽しい授業づくりを目指していかなければいけない。

特 中学校
集
No.3

在外教育施設派遣教員
からのメッセージを
活用して



明石市立高丘中学校

教頭 やまだ さちこ
山田 祥千子

主幹教諭 ますだ えつこ
増田 恵津子

1 はじめに

本校は、昭和50年に造成中の新興住宅地内に開校した。その後、校区は市内最大のベッドタウンとなり、昭和62年には生徒数1,346名、学級数31の県下有数のマンモス校となった。しかし、現在は生徒数402名、学級数14の明石市内で3番目に小さな中学校である。

数年来、本校では1年生で実施するスキー実習のインストラクターを外国人が行う。国籍はオーストラリア・ドイツ・カナダ等々。事前学習で『The Booklet for Communication in English』を活用し、あいさつ・自己紹介・困った時等の英語を練習して、実習に臨んでいる。遠慮がちな生徒も、インストラクターの『Are you ready?』のかけ声に乗せられ『Yeah!』と元気に答え、実習が進むに従って笑顔で交流する姿が見られるようになる。実習を終えるころにはすっかり打ち解けている。こうした体験活動を通した国際理解に取り組んできた。



▲ インストラクターさん、全員集合

2 在外教育施設派遣にあたって

「ジャカルタってどこにあるの?」「どんな所なの?」「ボルトに会えるかもしれないね、いいなあ（ジャマイカと混同している）」等。これは、終業式で増田教諭がジャカルタ日本人学校への赴任のあいさつをした時の生徒の反応である。ジャカルタについては、地理の授業で学習しているはずなのだが、このような反応だった。教科書を見てみた。そこには、熱帯の代表的な地域として「暑い地域の暮らし～インドネシアでの生活～」が紹介されている。しかし、こうして学んだ「知識」が、「活用」されていないことを実感した。

そこで、「インドネシアを知るために、現地レポートをHPに載せよう」と、出発前にジャカルタに赴任する増田教諭と約束をした。

3 HP「ジャカルタを吹く風」を活用して

増田教諭がジャカルタに着任後、まもなく「じゃかるた新聞」の記事が送られてきた。これを第1号に、その後1週間に1回程度の更新を続けている。毎回、数枚の写真とともに300字程度のコメントが添えられて送られてくる。そこからは、インドネシアの文化の香りが、豊かに漂ってくる。彼女が見たり体験したりしたインドネシアの様子が、直接伝わってくるのである。これほど素晴らしい教材はない。これを活用して授業をしようと考えた。

P C室で社会科の授業を実施した。めあては「外国の文化と日本の文化の違いを考えよう」に設定した。

まず、インドネシアと日本の位置・人口・面積・人口密度・首都等、既習事項を再確認し、比較した。教科書には気候・衣食住・農業についての記載がある。基本的な知識を整理したのち、各自でHPを閲覧し、めあてに沿って課題に挑戦した。



▲「へーっ、こんなところなのか、楽しそう！」

生徒達の「知っていたこと」は、

- ・イスラム教徒が多い。
 - ・断食がある。
 - ・ASEAN加盟国である。等
- 「ない」と記入している者も多い。

一方「知らなかったこと」には多くのことが記入されていた。席の近い者との意見交換も行った。あちらこちらで「こんなことは、日本ではないなあ」「初めて見たなあ」等々の声が聞かれた。「違い」を十分に見つけ、意識した。その上で、「異文化尊重」「共生」について考えてみた。

- ・国の文化が違うことは当たり前のことなので違いを理解し合いながら暮らしたり協力したりすればよいと思う。
- ・同じ国に生まれていても、民族・宗教・文化が同じだとは限らない。同じ国に住んでいるからこそ共に助け合い、支え合わないといけないと思う。
- ・私がジャカルタのことをよく知らなかったように、まだ知らない国は、たくさんある。知ることが、尊重する気持ちにつながる。まず、異文化を知る、気づくことが大切だ。
- ・宗教が違うから共生は難しいと思っていたことを、我ながらダメだと思った。
- ・やり方が違っていると、不思議に感じたり

変に思ったりすることがある。しかし、それがその国らしさであり良さだ。今日の日本の良さも感じた。両方感じたことが共生なのかな？

授業の最後に「振り返り」の感想を書いた。

- ・ジャカルタについて調べていくに従って、印象がどんどん変わっていった。
- ・国が違ふとこんなにも違うのかと思った。違いを知ることができてよかった。他の国のことも家で調べてみようと思った。
- ・ジャカルタは、授業で勉強したけれど、知らないことであふれていた。比べてみると、似ている所もあり、日本の文化が伝わっていると思った。

教師が考えていた以上に、生徒たちは、「異文化理解」、「共生」としっかりと向き合っていた。一人一人が、この授業をきっかけに、国際理解に向けて、第一歩を踏み出しているように感じた。

1年生 社会科 ワークシート

めあて 外国の文化と日本の文化の違いを考えよう
1年3組 氏名 ()

国データを確認しよう

	日 本	(インドネシア)
人口	12822(万人)	25216(万人)
面積	38(万km ²)	191(万km ²)
人口密度	339(人/km ²)	132(人/km ²)
首都	東京	ジャカルタ

ホームページで、日本と比べてみよう。日本との違いを見つけよう。

知っていたこと	知らなかったこと
	イクットバス 授業時間は50分 体育祭5色別対抗(赤, 白, 青, 黄, 緑) コーヒー農園が有名 大遺跡や王宮跡 ボロブドゥール 転入生小中合わせて約70人 インドネシア独立記念日 学校にも イスラム教徒 → 1日5回礼拝 断食(約1ヶ月間) 礼拝堂がどこにもある

『異文化の尊重』『共生』について、あなたの考えを書いてください。

たくさんの方で文化を伝え合い、ほとんどの国の人がある国の文化を知っていることが大切だと思います。そして文化を伝え合うことで共生にもつながり、たくさんの方の人と色々な関わりや、つながることによって、いって戦争などが少なくなっていくと思います。

今回の授業の感想を書いてください。

今回、インドネシアについて調べてみて、私は1つくらい知っていたことがあると思っていけれども、何もなくてびっくりしました。でも、ホームページを見てみてたくさん知ることができたので、良かったと思います。そして、共生や異文化尊重について考えることができました。また機会があればホームページを見たいです。

▲ 社会科の授業 ワークシート

4 HP「ジャカルタを吹く風」を通して

(1) 保護者より

学校の始業時刻について HP通信No.6

遠い国なのに身近に感じることができます。学校の始まりは7時30分。交通渋滞の緩和などから、日本と比べて、1時間も早いと知りビックリです。うちの子ども達であれば毎日遅刻だな…

バリ島から HP通信No.14・15・16

「ジャカルタを吹く風」を身近に感じます。バリ島には、家族が住んでいるからです。毎年夏休みは、家族で帰省します。そのため、「ここ知ってる～」と思って見えています。ジャカルタとバリ島との違い、更に日本との違いにビックリする事が多いです。

「Sampai jumpa lagi (またお会いしましょう)」

ルアックコーヒー HP通信No.27

コーヒーは好きでよく飲みます。コーヒー豆の産地でよく目にするのは、南米やアフリカが多いです。確かに、まれにインドネシアも見かけた事がありました。ジャコウネコの食べたコーヒー豆が高級品だというのも聞いた事はありませんが、ジャコウネコの姿は初めて見ました。思いの外、可愛かったです。味わえる機会は、残念ながらなかなかなさそうですが、いつか飲んでみたいなああと、より一層思いが強くなりました。

パティック※ HP通信No.28

製作工程が興味深く、実物を見てみたくなりました。現地に行かなければ知ることができないような、独特な宗教行事や文化も知ることができて、これからも楽しみにしています。※パティック…インドネシアのろうけつ染め布地

緊急時のバス送迎 HP通信No.30

一斉に下校して、バスにも先生が同行し、一人一人を確実に家まで送り届けるのはとても大変な事だと思います。それを訓練していることに対してもそうですが、バスの台数の多さも日本では考えられないのでびっくりです。日本は治安もそうですが、海外に比べると、凄く恵まれていて安全な事に感謝です。

※各号の記事は本校HPをご覧ください。

http://scwww.edi.akashi.hyogo.jp/~jr_tkok/

(2) 増田教諭より

毎週「ジャカルタを吹く風」を発信していますが、多くの方が読んでくださり励みになります。

インドネシア語の1単語もわからなかった私が宗教も文化も違うジャカルタに赴任して、早半年が過ぎました。実際に生活してみないとわからない様々なことを、毎週、驚きと共に日本の生徒たちに伝えることは楽しくもあり、励みにもなっています。私の記事を読んだ日本の生徒たちや保護者の方の感想を、実際に聞くことは難しいと思っていましたが、コメントをいただき大変恐縮しております。インドネシアは親日国の一つです。しかし、日本の生徒たちのほとんどは、インドネシアのことをよく知りません。私も赴任するまではわからないことが多かったです。相手を正しく理解することが国際理解教育の第一歩だと思います。私の記事が、未来の世界を作っていく生徒たちに、何か一つでも役に立つことがあればと思っています。皆様に楽しんでいただけるような内容を、今後も発信していきたいと思っています。

5 今後に向けて

本校の生徒は、比較的ホームページを閲覧している方である。しかし、「ジャカルタを吹く風」を「日本の文化との比較」という視点で閲覧したことはなかったであろう。そうした意味で、国際理解のための情報の受信方法を体験する授業となった。生徒たちは、今後も様々な国の情報を受信しようとしている。更なる「理解」のためには、双方向の受信・発信が必要である。まずは、ジャカルタ日本人学校にむけて、発信していきたい。願わくば、多くのサポートを必要とするが、テレビ会議の機会を持つことができればと考えている。直接、現地と交信する経験が発信力を身につけさせる。それらが、主体性や責任感・チャレンジ精神を育む。こうした積み重ねが、異なる文化や価値観を理解する姿勢を培い、国際交流に積極的に取り組む生徒の育成につながることを願っている。

特 高等学校 No.4 集

スーパーグローバルハイ
スクール課題研究活動を通
したグローバル人材の育成
～カンボジアスタディツアーと
移民政策学会での活動を中心に～



県立国際高等学校
主幹教諭 前川 裕史
まえかわ ひろし

1 はじめに

本校は2003年に開校した県立唯一の国際科の専門高等学校で、各年次が3クラスで構成されている。本校では、国際社会で貢献できる人材の育成を教育目標の一つに掲げている。

平成27年度、本校は文部科学省によりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定された。SGHの目標は、課題研究を通したグローバル人材の育成である。そこで、本校のSGHのテーマを「移民研究を通して未来の日本の選択肢を提案するプロジェクト」とした。本校ではSGH課題研究活動を1年次と2年次の総合的な学習の時間と、2年次の学校設定科目「言語技術」、3年次の学校設定科目「提案日本の選択」で行っている。その他にも、海外のフィールドワーク、国内のフィールドワーク、国内のスタディツアー、校内外において課題研究の発表を行っている。総合的な学習の時間では、ディベートや「世界移民マップ」の作成を通して、移民研究に取り組んでいる。

本稿では、これらの活動の中から特にカンボジアスタディツアーと移民政策学会でのSGH課題研究活動についての実践を紹介する。

2 カンボジアスタディツアーを通して

カンボジアスタディツアーの目的は、カンボジアでフィールドワークを行い、国を越えて人が移動する現状について調査し、その原因を考察することである。1年次生20人を対

象に2016年3月11日から15日の5日間の日程で実施した。

3月11日。8時に関西国際空港に集合し、ベトナム経由で17時15分にプノンペン空港に到着した。その後、カンボジアのインターナショナルスクールに通う3人の学生と一緒に食事をしながら交流会を行った。本校生は事前に準備していた質問事項を英語で聞き、コミュニケーションを図った。会話はすべて英語で行った。調査の結果、カンボジアのインターナショナルスクールの生徒の多くは、日本は高い技術を持つ国という印象をもっていること、日本のODA援助で道路や下水道の整備が進んでおり日本に対して好印象を持っている人が多いということ、将来は機会があれば日本に行ってみたいという希望を持っていることが聞き取り調査でわかった。

また、この交流会にはカンボジア政府関係者にも参加をお願いし、カンボジアでの移動労働の現状について詳細に報告をしていただいた。



▲ タケオ州シュムール村での子どもとの交流

3月12日。朝、プノンペンからタケオ州に移動し、本校生の募金活動によって集めたお金で作られた井戸を見学し、村の人たちと交流を持った。その後、タケオ州シュムール村に移動し、村の人に作っていただいたカンボジアの郷土料理を食べた。この村の活動拠点である仏教寺院にはたくさんの村の子どもが集まってきた。本校生は用意をしていたクメール語の辞書を片手にカンボジアの子どもたちに日本の手遊びや折り紙を教え、一緒に遊びながら交流を深めた。

昼食後、生徒は三つのグループに分かれ、それぞれ三軒の家庭を訪問し、移動労働経験者にインタビューして調査を実施した。生徒は用意していた質問事項について英語で質問し、通訳者がクメール語で現地の人に伝え、英語で本校生に答えるという形式で行った。計9名のカンボジア人に調査を行い、移動労働先はタイが圧倒的に多く、その理由はタイ以外の国の情報がないということがわかった。ほとんどの人が字の読み書きができないため、働き先の情報が収集しにくいことが推測された。その他、多くの聞き取り調査のデータが得られ、非常に有意義で貴重な体験となった。

夕食後は、シュムール村の人々との文化交流会が行われた。本校生は妖怪ウオッチの踊りを披露した。その後は現地の人たちとカンボジアの踊りを一緒に踊った。現地の人たちと交流を深めることができた一日だった。

3月13日。朝、シュムール村で朝食をとった。現地の学生スタッフや子どもたちと最後の交流をもった。英語でのコミュニケーションや現地の子もたちと簡単なクメール語でのやりとりになれてきた。朝早い出発にもかかわらず村の子どもたちがたくさん集まり記念撮影し最後の別れを惜しんだ。

プノンペンに移動し昼食後、市内のトゥール・スレン虐殺犯罪博物館を訪問し、カンボジアの歴史について学習をした。ポルポトによる虐殺やこれ以降続いた内戦の影響を受け、現在カンボジアでは30代以上が極端に少ない人口構成になっていることを学んだ。

その後プノンペン空港に移動し、空路でシュムリアップに着いた。シュムリアップで

は、カンボジア人のボム氏にお世話になった。彼は専門学校で日本語を2年間学び、現地で主に日本人観光客のガイドをしている。夕食時に本校生はボム氏に様々な質問をして移民に関する調査を行った。



▲ シュムリアップ州プロン村での聞き取り調査

3月14日。7時40分、フィールドワークに出発し、8時40分にシュムリアップのプロン村に到着した。プロン村では村長のシアン氏に出迎えを受けた。生徒は二つのグループに分かれ、シアン村長に紹介いただいた3組の家族を対象に、移動労働についての調査を実施した。計8名のカンボジア人に調査を行った。結果、移動労働先はタイが圧倒的に多いが、中には家族が賃金の高い韓国に出稼ぎに行っているという事例もあった。シュムール村との違いは、タイでの仕事はサトウキビ農園での農業従事や缶詰工場や手袋製造工場での労働など多様な業種にわたる点であった。移動の理由はより多くの収入を得るためというものであった。シュムール村との共通点は、移動労働経験者のほとんどが字の読み書きができないという点であった。そのため情報が収集しにくい等の理由で不法労働に従事させられる事例が多く発生していることが推測された。

フィールドワーク終了後、夕方にシュムリアップ空港に到着した。ベトナムハノイ経由で15日朝に関西国際空港に到着しカンボジアスタディツアーを無事終えることができた。

3 移民政策学会での活動を通して

日本における最先端の移民研究報告を聞くことで課題研究を深める契機とするため、移民政策学会2016冬季大会に参加した。

2016年12月3日、移民政策学会2016年度冬季大会が神戸女学院大学で開かれ、本校から1年次生4名と2年次生6名が参加した。

自由報告部会では本校2年次生が「カンボジア移出経験者への調査からみる日本における今後の移民政策への考察」というテーマで発表を行った。2016年3月に実施したSGHカンボジアスタディツアーでの調査結果を分析し、日本で取るべき移民政策についての提案を30分でプレゼンテーションした。その後、質疑応答の時間が20分間設けられた。移民政策学会で高校生が研究発表をするのは初めてで緊張感があるなか、フィールドの設定理由など様々な質問があったが落ち着いて対応できた。高校生に学会という場での発表の機会をいただき、生徒の今後の課題研究活動に大いに役立つ契機となった。



▲ 本校生による学会発表（2016年度冬季大会）

2017年5月27、28日、本校生2、3年次生の10人が、成城大学で開催された移民政策学会2017年度年次大会に参加した。

28日には「学会と高等学校の連携部会」が開催され、本校3年次生が「日本とイタリアにおける少子高齢化と移民問題の関係性」というテーマで研究成果の報告を行った。20分の報告の後、約15分の質疑応答の時間が設けられた。会場の約30人参加者の中から、多くの質問があり生徒は一つ一つ丁寧に応答した。また、研究報告に関して、多くの助言を

いただき、より研究を深めることができた。その後、高等学校と学会の連携の意義について、ディスカッションが行われた。現在、大学では高等学校との連携が求められているということ、将来の学会の発展という面からも高等学校との連携は意義があるという意見があり、今後も移民政策学会と高等学校との連携を継続していくことが確認された。

4 成果と課題

SGH課題研究活動の評価について、本校はルーブリックによる評価を行っている。目的は育てたい生徒の能力や資質について観点別に目標を設定し、課題研究活動の過程で評価を行うことで、研究活動における課題を検証し課題研究活動の改善を図り、生徒の能力や資質の向上につなげることである。具体的には、(a)創造的思考力 (b)批判的思考力・論理的思考力 (c)異文化理解、の三つの観点について4段階で評価を行っている。昨年度、この観点の中で特に(c)異文化理解力でスコアの向上が見られた。移民研究を行う過程で、様々な国について学ぶ機会があったことがその要因と考えられる。一方で、批判的思考力、論理的思考力を今後向上させることが課題と考える。

5 まとめ

SGH事業では、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高校段階から育成することを目的に、語学力と共に幅広い教養、問題解決能力等の国際的素養を身につけることが求められている。本校では、国内外のフィールドワークを通してテーマである移民問題に直接触れる機会を作ることで生徒自身が社会的な課題について深く考え、これらの課題を解決するための方策を自ら提案し学会を通して広く発信している。

SGH事業は5年間の事業であり現在本校は3年目を迎え、これらの成果が得られている。今後は、これらの成果をどのように継続し発展させ、他校と連携するなど、活動をどのように広げていくかが重要である。